

第8回教育懇談会議事録

日時：平成26年5月27日（火）10:00～12:00

場所：愛知県三の丸庁舎 アイリスルーム

<大村知事>

みなさん、おはようございます。今日もお忙しい中、8回目の教育懇談会にご出席いただきまして、ありがとうございます。

今回から、愛知教育大学の学長交替に伴いまして、新たに学長になられた後藤ひとみさんにご出席いただいております。よろしくお願ひいたします。

また、特別参加として、これまで皆出席していただいております愛教大OBの江川達也さん、ありがとうございます。引き続き厳しいご意見をよろしくお願ひします。また、今日はもう一人、名古屋外国語大学学長の亀山郁夫様にお越しいただいております。ありがとうございます。

前回、2月に開催しました第7回では、「学校教育におけるグローバル人材育成のあり方」を議題とさせていただきました。皆様からは、国際理解を深めること、自分の考えを堂々と発信できることが重要であり、外国人とのコミュニケーションをとる場を数多く経験させることや、国際バカロレア教育などにつきましてもご意見をいただきました。今後のグローバル人材育成の取組にしっかりと生かしていきたいというふうにご考えております。

さて、今日の議題は、「特色ある県立高等学校のあり方について」ということでございます。

経済のグローバル化や技術革新、高度情報化の急速な進展により、社会環境が大きく変化しております。その中で、生徒の興味・関心、能力・適性、進路希望などは、ますます多様化してきております。

そうした状況を受けまして、高校教育においては、次代を担う科学技術の分野や国際社会で活躍できる人材の育成、変化する産業構造に合わせた職業教育など、時代の動きを見据えた人づくりが求められています。また、不登校歴のある生徒や日本語指導が必要な外国人生徒への対応などの課題も出てきております。

そうした中、私も愛知県では、こうした環境の変化に対応した高等学校づくりを進めるため、今年度、今後5年、10年先を見据えた「県立高等学校教育改革基本計画（仮称）」を策定したいと考えております。

前回の高校の改革計画、要は再編計画というのは、平成13年から22年までの10年間やりまして、子どもさんが減りましたので、5つの高校を統合いたしました。本年度は、

27年度から10年間見据えた高校のあり方、計画というのを作っていかうと思っております。ただ、前回と状況が違うのは、27年度からの10年間は、前回の計画で見通した一番少ない高校の生徒の数を上回るということでございまして、地域の偏在性がなければ、新たな高校の再編というのは、数的には大丈夫なんです。名古屋周辺の尾張部と西三河は増えるけど、東三河は減っていくということでございますけど、トータルでは、数的には日本では珍しく、今後10年間高校生になる子どもの数が減らないということでございます。そういったことを踏まえて、どういうふう的特色ある高校づくりをやっていくか、今年一年間議論していきますが、そのしょっぱなで、皆さんにしっかりご議論いただくとありがたいということで、今日開かせていただきました。

それぞれご専門のお立場から、ご意見をよろしくお願いを申し上げます。

〔事務局から出席者紹介〕

<大村知事>

それでは早速、懇談会に入っていきたいと思えます。まずは、お手元の資料について、事務局から簡潔に説明をお願いします。

〔事務局から資料説明〕

<大村知事>

ありがとうございました。それでは、ご意見を伺ってまいりたいと思えます。

今の資料は、今後の我々が検討する論点についてまとめさせていただいたということでございます。そういったことを踏まえまして、各先生方のそれぞれの考え方と申しますか、ご意見を伺えればと思っております。それでは、名簿の順に、江口様から、ご発言をお願いできればと思えます。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

10年先を見据えた県立高校づくりに向けての課題ということで、私なりの考え方を申し上げます。昨日の日本経済新聞の教育面の記事に、たまたま、今回のテーマと非常に重なるものがございまして、ほぼ私の思っていることと一致する内容でした。

書いていらっしゃるの、文科省の元役人の方でしたが、そこに書かれている最大のポイントというのは、この中等教育の中で、個性化教育が大事だと言われているけれども、大きな問題点というのは、やっぱり中学校段階で、個性化教育ができていない、個性を育てるということをやっていないと。入学試験で5教科の点数を序列化して、レベルに合わせた高校に入れ込んでいくという形ですので、単に個性化教育をしようと言っ

ても、そもそも一番個性化をしていくに相応しいタイミングであるところで、やっていないものですから、結果的に、変化が激しい国際社会の中で対応できる人材が育っていないと。では、どうしたらいいかと言うと、前回のこの懇談会でも話題になりました、国際バカロレア教育の理念で、自由の理想、自由の学習というのがありましたけれど、あれなんかを参考にして考えていったらいいじゃないかと、そういう趣旨でした。

今回の課題の中で、理数、英語、芸術、スポーツなどを得意とする生徒の個性をどうやって伸ばしていったら良いかとありますが、確かにそれぞれの部分について、専門の学科を作るとか、コースを作っていくとか、そういう対応は必要だと思います。もう少しベーシックな部分、中学校の段階で、個性というのを拾っていく、伸ばしていくという、その風土というのを特に作っていくということに、特に重きを置く必要があるんじゃないかなというふうに思います。

そういう視点でいいますと、高校教育の中身を規定するものというのは、大学入試がどういう形になっているのかによって、高校で何を教えられるのか、どういう教育をしたらいいのかが決まってくる。同様に、高校入試がどういう形で行われるのかによって、中学校で何ができるかがやっぱり規定されていく。そういう部分でいきますと、高校入試のあり方として、その個性というのを評価していくような形というものを進めていくということが一つ重要な視点であるのではないかと思います。

それで、あともう一つ、高校における個性の作り方という部分、どうやって伸ばしていくかという部分ですが、それは色々な専門のコースとかを闇雲に作って、その学生、生徒のニーズをカバーするような物をいくらやっつけていこうと思っても、そういう生徒のニーズというのは変化していくわけですし、人気が集まるコースもあれば、そうでないコースもあるというふうになっていくのは、ある種しょうがない話だと思うんですね。私が特にこの場で強調したいのは、特色の作り方というのは、特定の学校に何とかコースを置くということよりも、すべての学校、特に普通科高校というのは放っておくと、構成比が全部レベルで切り分けられていくということになりますので、そうなりがちな普通科高校において、それぞれの学校の立地、環境、伝統、校風などを考えて、学校長さんが、うちの学校はこういうキャラクターを立てて、こういう個性を打ち出してやっつけていきますよというようなことを、学校長さんの判断、お考えで定めて、それに見合うような入学試験というのを、通常の試験にプラス α するような形で加えていけばいいのではないかと思います。その学校に入ったら、専門のコースに入らなくても、学校全体が、例えば、国際性を身につけるようなことを普段の授業から積極的に取り入れるとか、ここに例示されていないものの中でも、政治に興味がある子であれば、政治家の先生を呼んで何か話を聞かせてあげるとかということをやればいいですし、そういう学校のキャラクター作りを学校長さんに委ねて、それに見合うような学校入学試験というのを個々に認めてあげて、そういうことで個性化というのを進めていくのが一つの方法では

ないかというふうに思います。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

学長という仕事はまだ2ヶ月経っておりませんので、そちらの関係というよりも、私が3月までやってきた自分の専門から、お話をしようと思います。専門は養護教諭を育てることでしたので、高校の再編に関しては、数年前ですが、神奈川県養護教諭の方と、再編事業を巡って学校はどう変わるかということについて共同研究したことがあります。再編事業を経た彼女たちから教えられたことがあるので、それをご紹介しようと思います。

まずは、総合学科ですが、総合学科にしたら、色々な用意をした結果、教員が1.2倍くらいに増えたそうです。選択の幅を増やすと言って。ところがですね、神奈川の最近の状況について、あくまで聞き取りということでお許しいただきたいのですが、話を聞いていますと、今、経済状況がよろしくない中で、これを維持していくのは非常に厳しいということで、総合学科を普通科に戻すという流れが起こっていると聞いています。その時に、設置の時から課題であったのは、総合学科を作る目的は何なのか、どんな生徒を育てていくのかということですが、現場サイドで明確にならなかった、だから関わる身としては辛いものがあったと聞いています。また、私の友人が、総合学科にも勤務しましたがけれども、単位制の高校にも勤務していました。単位制になった場合に起こりうるのは、生徒としては、非常に自由なのですが、例えば、学級経営というのを考えた時に、生徒一人の単位で自由に授業を取ることができる、その一方で、学級というのが存在しなくなってしまうということでした。高校の時には、コミュニケーションを含めて、集団の力学っていうのがとても大事なんですけども、そういう部分がうまくいなくなる。しかも、自由に取れる一方で、取りきれなくて、4年目に突入というような留年組も増える傾向があると話していました。同じ単位制でもフレキシブルスクールは、ちょっと人気が良いそうです。何故かと言うと、単純な単位制だと、朝の1時間目とか、2時間目に必修科目を入れる。その方が、1日のスタートがいいから。しかし、単位制という自由度があって、なかなか統率が取れていかない。フレキシブルスクールの場合には、そういう課題を考えながら、学校独自のカリキュラムを考えているそうです。ですから、総合学科を普通科に戻そうという一方で、フレキシブルスクールを増やそうという動きがあるということも聞いています。

だから、単位制で自由度云々という話になったとしても、先程、個性という話がありましたけれども、生徒に選択の幅を持たせるというのは個性の尊重にもつながっていくと思うのですが、それを学校がカリキュラムとして組んでいくという時には、メリット、デメリットがあるというようなことを話していました。

さらにですね、職業科の問題があります。知り合いが勤務した学校にも、普通科と福

祉科があったそうです。普通科は進学イメージがあるのですが、職業科である福祉科だと、福祉関係の職に就くんだらうという期待がすごくあります。しかし、フタを開けてみると、結果的には、高校レベルの福祉というのは、そこでは完結しないので、そこから先をどういう道に進ませていくかという、一定の学力保証がないと、専門の短大なり、大学に進んでいくことができないということでした。また、総合学科に統合化していった時に、ある学校は田舎で、非常にアクセスが悪く、ある学校はアクセスが良いところにあったが情報に特化していて、今一つ人気がなかった。両方をくっつけたら、確かに一時的に学力はあがり、しかもアクセスの良い方に高校を統合化したので、生徒が集った。しかも、学区をなくしたので、生徒が色々なところから集まって良かったということは言っていました。ただ、先程言いましたように、単純に総合学科を統合の中で作り上げていっても、人件費の問題もさることながら、どういう教育理念で高校の特性を出していくのかということが明確でないと、子供が少なくなっていく状況の中で、維持できない現実があるということです。

あともう一つだけ気になっていたのは、中高一貫という言葉が出てきますが、いわゆる教科中心ですから、中学校と高校というのは、親戚関係のように思われがちなのですが、現場サイドで意見を聞いていると、私自身、感じるのですが、小中の一貫性というのは非常に理があると言えます。発達的にも中学校1年生の問題があり、小学校の高学年で色々な課題が出てくるのですが、小学校の先生達は、6年間の教育を終えると、色々な課題が見えたところで、中学校に送ってしまうことになる。本当は中学校の3年間こそが、その子の人生にとって、とても大事な時期です。それをカリキュラムの中で、保証するなら、むしろ小中一貫の方が子供のためになるのかなというふうに思います。中高になってしまうと、教科制で、似ているように思うのですが、やはり中学校までの義務教育と、高校というふうに、学力とか、職業とか将来の自分のキャリアということ色々意識して選択する学校というところは、異なってしかるべき。それを中高という形で繋げてしまうと指導や教育という部分で難しいかなと思っています。

要は、今の中高一貫、小中も含めてですね、高校がどうあるべきかと考えたときに、やっぱり大事にすべきは、子ども一人ひとりのキャリアデザインなんだろうと思います。しかし、現場はキャリア教育という言葉を使いながら、あまり子どものキャリアというものについて、十分やり得ていないのではないかと思います。教員を養成している本学も同じような課題を持っていると言えます。つまり、キャリアの専門家が大学にいますが、教師になるすべての学生たちが子ども一人ひとりの特性を見出して、生涯のキャリアデザインとして育てていく、そういう姿勢を身につけさせるには、まだまだ本学にも課題はあるかなと思っています。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

先程説明をいただいた際、確かに社会環境というのは非常に大きな変化をしており、それを受けて、高等学校の教育も様々な取組をしていらっしゃるということですが、私としては、もう少し落ち着いて考えていただきたいと思っています。

つまり、企業側、受け手という立場からすると、求めているものは、学校が今様々な取組をしていることとは少し違うような気がします。基本的な力、やはり、高校の場合には、いわゆる基礎が大事です。

学校では、生徒の興味・関心ということで様々な取組をやっていらっしゃるのですが、こう言っでは失礼ですが、高校で数年間取り組んだことは企業の仕事の場では、あまり役に立たない。企業の中の動きに対応していく上で、最後にものを言うのは、やはり基本的な力であり、人間性みたいなものですので、その点をもう一度原点に戻ってしっかりやっていただきたい、というのが1点です。

そういう面では、生徒の変化、生徒の興味・関心といったことに多様化が進んでいる、確かにそうなのですが、子どもの単なる興味ですよね。本当に一生を懸けてこの仕事をやりたいとか、こういうことを取り組みたいとか思っているわけではない、と私は思っています。ですから、そういうことに対して、高校もバタバタとそれに合わせたカリキュラムを急いで作って、こう言っではなんですけれど、付け焼刃の教育をしても、企業に入って、あまり本人にとってもプラスにならないと私は思っています。ですから、もう一度原点に戻っていただいて、やはり、学校教育でやるべきことをきちっと決めて、それを徹底的にやっていただきたいなと思います。

そういう面では、学校というのは、どうしても、生徒さんはおお客様ですので、生徒の気持ちに合わせたい、それがひいては志願者数に結びついてくるので、そちらに囚われがちなんです。本当に生徒のことを考えれば、高校を卒業した先の大学とか、あるいは企業、社会といったところで必要とされる能力とか、本当に求められているものを掴んで、それは生徒にとって必ずしも楽しいこととか、面白いことではないかもしれませんが、そういったことを生徒には嫌でも身に付けていただくということを、是非もう一度考えていただきたいと思っています。

<関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏>

私は、教育の専門家ではないのですが、日頃感じていることを数点お話をさせていただきます。

教育を考える時に、例えばノーベル賞を受賞された野依さんや白川さん、島津製作所の田中さん、そして文学賞を受賞された方々もいるのですが、その方たちがどういうキャリアを歩んできたかという、必ずしも、早期に実力が開花していたわけではないような気がするんですね。意図的に早期に自分の将来設計やキャリアを自覚させて、そういう教育を早期に行うことがどれだけの効果をもたらすのかということ、を少し考える必

要があるのではないかと思います。

大学教員の立場としては、大学に入ってくる時に学習習慣と基礎学力をしっかり付けて欲しい、土台をきちんと作ってきて欲しいというのが、切なる願いでございます。入試の多様化とともに高校までで身に付けておくべき学力が備わっていない人たちがたくさん出てきているんですね。

それで、これから何をすべきかということなんですけれども、まず1点目としましては、これまでも、文科省の政策で、スーパーサイエンススクールですとか、グローバルリーダーの養成というような、特色ある学校づくりのための政策があります。

私は、物事の解決策やいろんなアイデアというのは現場にあると感じておりますので、こうした事業の中で現場が今何に困っているのか、教える人材不足なのか、それとも予算なのか、グローバルリーダーといっても高校の時に1回も海外に出ないのであれば、自分がグローバルリーダーになれるのかどうかも分からないわけで、カリキュラムが不足しているのか、既存の政策をレビューをしていただきたいと思います。

科学的リテラシーを国際比較して調査した結果によると、リテラシーが高い国の生徒というのは、必ずしも勉強時間が多いわけではなくて、学校の中での授業時間に非常に多くの時間を費やしている、ですから、学校の授業がいかに素晴らしいかということでリテラシーが高まっていくことが分かっているんですね。ですから、現場の先生たちが今の授業の中でもっと実力を発揮できるためには、何をしたらいいか、そこにヒントがあるんじゃないかと思います。

2点目は、職業教育のことです。職業の専門学校を出ても、仕事に就けていない。これは、せっかく投じた予算が無駄とまでは言えませんが、生徒たちに興味があるものでしたら、そこを削いでいることにもなりますので、教育だけでなく、やはり受け皿をどう作り出していくのか。例えば、農業人材をこの愛知でどういうふうにすれば就職の口が作り出せるのかということまで、トータルで考えていただきたいと思います。

3つ目は、不登校や外国人の方たちが、今、愛知県には日本一多いということで、各地で大学生を活用した補習などもやっています。こうした方たちの課題というのは、何も学習面だけではなく、親御さんが言語の問題があって地域に馴染めないとか、片親世帯で経済的問題を抱えているなど、いろんな問題があるわけで、こういった福祉的な面も一緒に解決していかななくてはいけない。ただ、それを教育現場でやるとなると、なかなか難しいんですね。

各地で活動しているNPOの人たちに予算を投じて補習をしていただく、そして、福祉的なケアも合わせてやっていただくというように、予算の実行者と活動する主体者を離していくことが私は現実的だと思います。

もう一つは、今、タブレットを使っていろんな授業の可能性が出てきています。日本語がおぼつかないのであれば、タブレットを無料配布して日本語の補習をうまく授業時

間外でやるようなことも考えていいのではないかと思います。

オランダの教育を視察させていただいた時に、高校のスポーツ選手、サッカーやアメリカンフットボールなどの非常に有能な選手がいるところで授業の補習をしていました。何故そういうことをやっているのかというと、将来、体を壊してスポーツの選手になれないケースもある、その時に、子どもたちが困らないようにきちんと基礎学力をつけていくということなんです。非常に早期の進路設計というのは、見誤る可能性もありますし、自分が思ったとおりに自分の人生設計がいかないケースもあるわけなんです。そうしたときに、やはり大事なものは学力です。

これからの学力というのは、今、社会環境の変化の中で少し変わっていくというお話もありましたけれども、私は、普遍的な学力というのは、時代を経ても変わらないと思うんです。ここをしっかりと身に付けていく方策というのを、ぜひ見極めていただきたいと思います。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

日本語指導が必要な外国人生徒の受け入れにどう対応していくかという、テーマでお話をさせていただきたいと思います。

資料の8ページに、「不登校生徒や外国人生徒への対応について」というデータが載っております。愛知県が、小学校、中学校を中心として、日本語指導が必要な外国人生徒が突出している。前回の教育懇談会の中で、愛知県がグローバル人材を育成するのであれば、こっちが出て行くのではなくて、海外から生徒や児童に来ていただく仕掛けをすればいいじゃないか、もっと愛知県の中で教育していけばいいじゃないかという話を、私だけじゃなくて、何人かの先生がおっしゃっていたのが記憶に新しいのですが、こういった外国人児童・生徒を受け入れておきながら、その後どうなっているかというデータは出ていません。私が調べたところによりますと、県立の定時制高校で日本語を話せない外国人が卒業する割合は、30人クラスで5、6人ぐらいしかいない。つまり2割ぐらいしか残らない。一般の日本人でもだいたい3割強らしいので、それに比べてもかなり低い。受け入れはしたけれども、その後の指導がなっていないところを問題にすべきだと思います。

愛知県に海外からの児童・生徒が多いのは、工場での派遣労働者として海外から大人が来ているので、その子どもが学校に通うという理由でよろしいですね。だとすれば、両親が家でどういう教育をしているかというのは、全く把握されておらず、虐待とか、或いはまともに家庭教育をやっていないところが散見されるようです。定時制高校で本当にこの子たちの面倒を見ていくためには、通常のいわゆるコーチングとかのレベルではなくて、カウンセリングとか、認知行動療法とか、そういうレベルの治療的スキルが必要なようです。現状では、教員はそういうスキルを持っていないし、どうせあと何年

かしたら別の高校に異動するから、うまくやり過ごすということが多らしい。ある教員は、1クラス30人は無理で、10人がやっとおっしやっていました。多分、ここにかなりの手当をしていかないと、愛知県が全国の中でも先進的に課題となるころだと思います。その先生は、カウンセリングや認知行動療法のスキルを持った教員をたくさん入れてほしい、1クラス当たりの人数を減らしてほしいと言っていましたけれど、結局、家庭教育では期待できないので、その子たちが日本の学校の中で、勉強を続ける学習習慣とか、キャリアモデルというのを、徹底していく必要がある。キャリアモデルと言っても、大きなキャリアモデルではないですよ、何でニートやフリーターになると将来困るのかという話をする必要があるんだろうと思います。

トップの高校生には、理数や英語などを得意とする生徒の個性を伸ばすことについても言いたいことがあります。カリキュラムモデルは、1999年に探究科をつくった京都市立堀川高校、この春に最初の卒業生が出た2008年に中高一貫校として注目を集めた県立千葉高校などを調査すれば、結構見えてくるのではないかと思います。ガリガリ受験勉強で合格実績を上げているわけではなくて、(堀川高校は京大合格40名を超えているような実績を、結果として上げていたり、県立千葉高校も、東大こそ4名減ったけれど、旧帝大、医学部合格者はアップ)、いろいろな探究活動をさせていくと、結果的に進学実績が上がったらしいですよ。総合学習を中心とした探究活動、課題発見解決型学習ですね、中高一貫校では総合学習を早期化したり、堀川高校では、1年生と2年生の前半までを使って、探究活動をさせることを通して、理数とか英語とか、或いは芸術とか、大学のゼミに近い内容をやることで、生徒も変わっていくという報告を受けています。トップのところはそういうことなんだろうと思います。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

6割ぐらいが大学に進学する時代で、結局、大学を出てから専門性を身につけたいということで、また専門学校にいくタイプがあって、どういうことが起こっているのかということを日頃から思っています。例えば、個性を伸ばすということで、色んな選択が行われているのですが、どこをどう選んでいくのかという選択能力の問題もあって、なかなか判断ができなくなっている。大学に来てからみんな悩むわけです。それでは遅いと思っているんですね。そうすると、その前のステップで、どこでどういう学びをしていかなきゃいけないのかということを日頃思っているわけです。

そこで、とにかく大学入試が変われば下の教育が全部変わることは事実ですが、段々変化は起こりつつありますけど。これは大きく望めない。私は、義務教育の段階とその後の段階、小中とか中高とか高大の連携があります。この連携は、そこだけ見ても仕方がないと思っています。小中までの連携と、中高の連携、高大の連携は違ってくるはずなんです。とくに基礎学力、義務教育の段階で、考える力や人間関係がある程度の

段階でできてないと、いくらその後に専門性といっても応用できないんです。基礎がなくて専門性はできっこないんです。

そういう面で言うと、やはりある程度は義務教育の段階で、キャリア教育も必要ですけど、自分が何を得意とするかを考える教育をしないと、高校での選択でまず普通科に行ってしまうことになる。普通科に行ったら、とりあえず大学まで行くと。では高校の専門科に行ったけど、その子たちがそこで自分の将来を見通せるかという見通せなくて就職率は落ちるわけです。高校までの専門性と、大学出たからの専門性は違う。工学部なんて大学院に行かなきゃもうだめなわけです。そういうところでいくと、領域によってはですね、高校までの専門性と大学の専門性とは違うわけで、その辺の所を、教育の中でそれぞれステップアップしていくということを考えて行かないとなかなか難しいと思います。

特に、商業のところですね。就職の問題が出ています。実はですね、普通科と併設している学校の商業科の生徒がどういう意識を持っているかという、かなり普通科に対してコンプレックスを持っている生徒がいます。これでは、そちらで頑張っていこうという気持ちは起こらないわけです。もっと上のレベルにいくと、スーパーサイエンススクールでは、学校がほとんどそちらに向いているとそれに合わないタイプの生徒がいるわけです。それで途中でリタイアしそうになってしまう生徒がいるわけです。スーパーサイエンススクールになって、学校全体がそういう方向にいくと、どうしてもそれに合わないタイプが出ちゃうわけです。そういうことを考えて行くと、これから考えて行く時に、併設とか単独校の場合にどういう形で特色を持たせていくか考えないと、興味・関心は下がっていく一方だと思っています。

特に、今そういう選択が難しい状況の中で、不登校が起こっているんだろうと思います。学習意欲が減少している。これでは多くの人に興味がなかなか湧かない。さっきも総合学科の話が出ましたが、総合学科ほど特色をつくるのが難しいわけです。その中から選ぶといっても自分で選ぶ能力が育ってないところで、何をやっていいのかわからないんです。その前に、やはりある程度、自分なりに進路をどう考えていくかの指導をしてもらわないと、総合学科とか選択というところの高校の難しさがあると思っています。

もう一つ、外国人の問題ですね。この問題は、外国人に日本語を単純に習得させるだけでは絶対興味は湧かないわけです。例えばですね、よく日本の教育が批判されたのは、アジアから来た人が日本の学校教育から戻った時に、日本で受けていた教育を自慢できない人が多かったんです。だから自分の子どもたちを他の国に送っている子が結構いたんです。今日本にいる子どもたちが、ここで受けた教育がやっぱりよかったという状況で、自分の国に帰った時に、日本の教育のことをよく言ってくれたら全然違った世界になるわけです。日本で、もし頑張っていく場合には、日本で技術を得たいという人も多

いわけです。そうすると、その子どもたちが、日本語を習いつつ得ていくには、日本の文化・社会を学んでいかなきゃ。昔ですね、豊橋の中学校で、1週間に1度だけ母語で日本の教育内容を教えるという、いきなり中学校以上で日本の内容を日本語で教えても理解できっこないということでそういう試みがなされていた。多分今もされていると思いますが。母語で日本の文化を学びながらという形で適応を図っているということをやっていると思います。

とにかく外国の子どもたちが、中学校以降で脱落していかないようにしていかなきゃいけないと思っています。色々な技術を身につけたりすることで、日本の社会の中で自分がやっていけるところを見つけていければ、やはり日本にとってもプラスになるわけです。そこで一番恐いのは、脱落して、犯罪とかなんかに関わってくることなんです。そのへんのことを含めると、やはりできるだけ高校時代に専門、その専門は大学とは違うけれども、小中高のそれぞれの段階で、上に繋いでいく教育をどうするかということも広く考えていかないと。個性を伸ばして自分の興味があったもので、将来これでいこうという気持ちはなかなか起こってこないんじゃないかと思っています。

<漫画家 江川達也氏>

皆さん多分見てないかと思いますが、最近、NHKの番組で葛飾北斎の番組が放映されたんです。漫画っていうのが名古屋で生まれたという話で、北斎漫画というのは名古屋で出版されて、ちょうど北斎が名古屋で滞在中に作られて、それから漫画の基礎ができたというような文脈で、すごく自分にとっても新鮮だったし、なるほどと思ったんですね。そういうところでですね、皆さんとはちょっと違う、新しい特異な意見なんですけど、「うどん県」というのをどっかの県でやっているようにですね、名古屋も「漫画県」にしたらいんじゃないかと考えました。

結構これからのICT教育という部分で、コンピュータを使って反転授業というのがあってですね、佐賀県でやっているのですが、最初は授業をやらずに、知識みたいなものは最初にビデオとかコンピュータでそのまま吸収させて、授業はもうちょっとそれを基礎に深く考えさせるっていう授業が最近のちょっと流行りで、佐賀県なんかでかなりやって、最近それが後退して批判されているんですけど、やはりコンピュータができてくると知識に対しては映像で吸収すればいいわけで、映像で知識を吸収して実際にみんなが活動して、意見を言ったりとか、共同で活動するのを実際の学校の授業でやる、そういう形が世界の潮流になっているというか、最先端になっているみたいなんですよ。

アメリカなんかだと、すごくその教材が充実しているんです。映像が使えれば、要は学校にいかななくてもそこにアクセスして無料でそれを見れば、知識がどんどん入ってきて学校に行く必要がなくなっているという現状があるんです。

これからはどう考えてもコンピュータが発達してくるので、例えば会社でも最近はず

レゼン能力が高い人が評価されていて、いかに自分の意図を相手に伝えるかということでコンピュータを使って映像で伝えるということが潮流になっているみたいなんです。

そういう意味で漫画っていうのは、映像と言葉を使いながら人に伝える能力がすごく必要なメディアなわけで、それを紙っぺらで描いているわけじゃなくて、最近は個人で映像化できるようになっていくわけで、そういう能力を高めていく教育をしていかないとこれからダメなんじゃないか。逆に、将来のそういう能力は実はアナログで、江戸時代からある北斎が始めた漫画の中にずっとあるので、そういう教育をベースに考えて行くと、将来の力にもなっていくんじゃないかと思います。

結局、学校の授業が受動的すぎて、能動的に自分が何かやるのが少ないので、学習能力を上げるためには、集団で映像をつくるとか、そういうものを通じて能動的な活動を増やして、それをベースに受動的な吸収も上げる、そういう形が望ましいと思います。コンピュータもただ習うだけじゃなくて、自分でプログラムを作る上で、数学が絶対に必要になってくるんですね、高度なプログラムを作ろうと思うと。実際に自分が作りたいプログラムを作る過程で、数学の高度な知識が必要だということで、実際に数学を学んでいくという形が出てくると思うので、何か人にものを伝えるっていうものを作ることを主眼にした教育をもっと進めていったらいいと。

実際に学校の先生も伝えるのがプロなわけだから、そういう映像とか教材を作れるだけの先生になって欲しいとすごく思います。実際に一人ひとりが同じ内容の授業を各学校でやることはコストパフォーマンスが悪いですよ。だから 1000 人いて、その中の 1 人がすごい映像をつくれれば、他の人の無駄な時間やコストはいらなくなる。そういう意味では、愛知教育大学にもそういう映像を作れるような先生をどんどん輩出するようなカリキュラムを作ってもらって、何人かそういう精鋭部隊をつくって、映像で教えて、実際に学校の活動は、それを基に自分達で何かを作る。要するにモノづくりが愛知県の特徴なので、そういう形で愛知県がゴロッと変わってくると新しい先鋭的な学校、県になっていくと思います。

<大村知事>

極めてまともな意見ですね。

<名古屋外国語大学学長 亀山郁夫氏>

今日のテーマの一つに、理数、英語、芸術、スポーツなどを得意とする生徒の個性を伸ばすという、かなり具体的な問題設定がなされているのですけれども、それぞれの生徒たちが、今後 80 年から 85 年という非常に長い人生を生きる中で、どこで自分自身の個性に目覚めるかということが、非常に重要な意味を持っていると思うんですね。早ければ早いほどよいというものでもないと思っています。というのも、やはり、人生どこ

かで息切れしてしまうようなところがあるので、しっかりと自分自身の最も核となるものの自覚といったものを掴む、掴ませるといふ、そのタイミングをそれぞれ一人ひとりに見極めさせるというか、指導する側は、そのことをしっかりと意識している必要があると思っております。

繰り返しますが、個性化というものは、人生 80 何年の生涯を生きていくためのコアとなるものだと思うんですね。そこから広がっていくので、例えば中学校の段階で非常に得意であること、これは別にピアニストになるための道ではなくて、その後何十年か生きる上で、そのピアノを学ぶということを通して、開けてくる人生とか、それを通して学ぶ世界観ということが個性化、その人自身につながっていくと思ってもらい、やはり、今言われている中学くらいの段階での個性の発見ということは非常に重要なテーマであろうと、自分自身の生き方に則しても言えることだと思っております。

先程から 80 年とか 85 年ということ強調するその理由というのは、私自身も中学校時代は、どちらかという内向的で、ひよっとすると今の言葉で言うとアスペルガー的なところもあり、自分なりに内向的な悩みを抱えながら生きていて、それが 40 歳の時に、そういった内向的なものが外に向かって開かれたなというような、漠たる実感をもっているからです。そういうことを考えた場合に、グローバル化といった言葉で、生徒たちを外へ外へと向けていき、個性を開いていこうという教育は、それなりに今の日本の将来にとっては重要かもしれないけれど、逆に、何かを失念している可能性もある。つまり、非常に内向的な志向性を持ち、すぐれた能力を備えた生徒たちの指導です。彼らを、どううまくリードしていくかということが重要だと思いますね。少し話が大きくなりますが、例えば、スティーブ・ジョブスにしても、スティーブン・スピルバーグにしても、いわゆるアスペルガー的な、内向的な中で長く身を浸すことによって個性が爆発するというようなことがあったわけです。ですから、外へ外へと画一的に押し広げるような教育や指導というものは、必ずしも望ましいものではないと思っております。

先程、江川先生の方から話があった情報による教育がこれから一般化するので、そこで一通りのことを学んで、そこから個性が発展するんだということはまさにその通りだと思います。

私も 60 歳までは、ほとんど煩雑なペーパーと言葉によって授業を行ってきましたけれども、それだと学生はほとんど寝てしまいますね。そこで 60 歳を超えてから、初めてパワーポイントを作るということを中心、毎回、かなりの数のパワーポイントで講義をしたり講演をしたりすることができるようになったんですね。そうすると、やはり聞き手の中の意識の覚醒というのは、格段に違っているということもあるので、一人ひとりの教員がある程度の時間の犠牲を伴いつつも、そうしたインタラクティブな教育が可能となるような努力をしていくべきだと思います。

私が今、一番興味を持っているのは、教養教育ということで、その点からも総合学科

が今後どんなふうな道を辿っていくのか、大いに興味があります。

実は、昨日の中日新聞に名古屋外国語大学の一面広告を張りました。その理由というのは、私自身が東京外国語時代に実現できなかった教養教育カリキュラムを、自分なりにイメージしてきた理想の教養教育プログラムを名古屋外大で実現することができた、そこでこれを大いにアピールしようというもくろみだったわけです。もちろんまだ形が整ったという段階にすぎませんが、そこで、世界教養という考え方、あるいは、ワールドリベラルアーツということなのですが、それは、この高校の段階では、総合学科が自主的に自分自身の趣向に合わせたカリキュラムを作っていく、そしてプログラムとして構築するということですが、そういうことが高校の段階で行われるとしても、やはり教える側、それを利用する先生の資質が問題になってくる。つまり総合性とか教養とか言っても、それを教えている先生に総合性や教養がない場合が少なくない。それでは教養とは何かと言った場合に、それがまさに問われている問題であって、教養はもちろんいわゆる一般常識とは大いに異なる。80何年の人生を根本において規定しているものが教養であるなら、やはりある種、命がけのものとならざるをえない。たんに幅広いだけの知識では決して命がけのものにはなりません。教養とは、幅広い知識と有機的に結びあう何かしら非常に深い、何か人間的な経験に裏付けられた知性、あるいは知識の集合体だと私なりに捉えているんですね。

ですから、総合学科なんかが、そういう可能性を引き出すようなシステムとして機能していくには、やはり、先生の再教育といいたいまいしょうか、先生が、どこまで自分自身を教育するという情熱に目覚め、なおかつ、そこに教養という軸を立てることができるかということが非常に大事なかなと思います。

<大村知事>

はい、ありがとうございました。一巡いたしました。引き続き、また、今からご意見を伺いたいと思っております。それでは、ただ今、御議論いただきましたことを踏まえながら、特色ある高等学校づくりを検討していく上で、今後重視すべき課題、取組などにつきましても、あわせてご意見を伺えればと思っております。

それでは、また、江口様からよろしくお願いします。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

県立高校づくりにおいて、重視すべきことについてお話ししたいと思います。県立高校は公教育でありますので、私がそこで一番重要だと思っていることは、下を作らないということ、そこに、公教育が一番の力点を置くべきだと思っております。そこで言う下というのは、言い方は悪いのですが、前半のテーマでも取り上げられました、日本語ができない生徒への対応とか、不登校の経験のある子、学力が十分に身につけていない子

とか、そういう視点でそこを引上げるというのが、一番重要視すべきことであると思っていて、上の方の子を伸ばしていこうということも、それはそれで大事は大事なんです、それは、二の次の話かなと思います。

そういう点で言いますと、私は教育の専門家ではなくて、経済の分析屋ですので、そういう視点からしか多分言わないだろうということを申し上げたいと思います。

これは随分昔に、この会議でも問題提起をしたことなのですが、学校配置の地域格差の問題です。今日は資料を持ってきませんでした、愛知県の公立高校に進学校を地図にプロットすると、どうしても特定の地域、市に集中しているということがあります。名大に2桁入った学校を地図に示すと、ポッカリ穴が開いているエリアがあるんですね。具体的にいうと、名古屋市の南西部から蟹江とか弥富とか、あのあたりの地域、それから犬山から小牧にかけての地域、特に前半のところはすごく広いのですけれども、同じ県内でも、人口密度によってももちろん違いがありますので、完璧な平等というのも難しいのですけれども、ある程度の人口密度のあるエリアであれば、どのエリアに住んでも、ここの地域に住んでいて近く为学校に行ったから、大学への進学が難しいという地域はやはり作ってはならないというふうに思います。したがって、まず一つ、地域格差ということと言うと、今、存在している各高校の進学実績等を見て、もし、ここの地域がちょっとまずいなという所があるのであれば、そこへの手当というのは、やはりしておくべきであろうというふうに思います。

それから2つ目、外国籍の日本語ができない子の話ということで、先程、谷口先生の方から深いお話をいただいて、私も先生に同感なのですけれども、ただ、この外国籍の子の話というのは、主戦場というのは、小学校と中学校だということは明らかだと思います。これは、資料の8ページのところに、日本語指導が必要な外国人児童生徒数ということで、愛知県の場合だと小学校は4,000人、中学校は1,600人、高校になるとバンと減ってしまう。なぜ減るのかというと、高校に入れなからということだと思うのですね。

一方、受け入れる学校にとっての外国籍の子どもたちのいる意味、そちらから考えると、小学校では、外国籍の子がいることによるメリット、いろいろな言葉を話し、いろいろな外見をし、日本人とは違う人たちが隣の席にいることによるメリットは、普通の日本人の児童生徒にとって、ものすごくプラスになることだと思います。それが段々年を追うごとに変わって行って、中学校になると、日本語ができない子がいてしまうとそこで授業がストップしてしまい、勉強が進まなくて困ったというふうに少し変わってくる。高校になると、一般的に日本人の子と外国人の子がかなり分かれていってしまうので、一緒にいるということのメリットがない。ですから、愛知県は、外国籍の方が多く、逆にその環境をプラスに変えていく、変えていける可能性がある県ですから、特に外国籍の子に対する対応というのは、小中、特に小学校のところで手厚くやっていくという

ことが必要なんだろうなというふうに思います。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

先程来、皆さんがいろいろ話された中で、なるほどと言うか、改めてそうだなあと思ったのが、結局は基礎的な力とか、人としての生きる力とか、人間性とか、そういうものが、どの段階でどこまで育てられているか、それがその人の生涯をある意味決めていくというご発言が複数あって、そのための公教育と聞いていました。

先程の話にも出ていましたが、最近スーパーなんかという特化した取組があり、中高一貫が成功した例とか聞きます。でも、これは選ばれし学校の例なんだろうと思うんですね。

例えば、愛知県の子どもたちを育てていく中で、非常に特化したモデル的な、さっき漫画県という話がありましたけれど、そういう特色を付けていくという方向が一つあるし、その一方で、先程言ったような、本当に基礎的な力を育てていくような教育のあり方、という原点帰りがあります。その時に、高校に入ってからの特入れというのは限界があるかな、と思う面もあります。

というのは、若かりし頃に、塾で中学3年生を教えていた時のことですが、中3ぐらいになると、もう学力で自分が行く道というのが決まっているんですね。男子生徒はシビアで、お互いのことを、例えば、あいつは進学校に行き、医師になって将来儲かっていく、という半分誉めるような羨ましげな発言をする一方で、じゃあ話しているこの子はどうなんだろうっていうと、まず、そういう大学への進学はちょっと難しいかなあ、という状況が見えているんですね。

そういう現実を、中学生3年生ぐらいの子どもたちが、高校を選択する時に意識している。それが日本の教育の弊害だと思うんですね。いい学校に進んでいけば立派な人であるということは決してないけれど、そんな幻想を抱かせているところがあります。だからやっぱりそうではなくて、個性を導き出すのは、難しいと思うけれど、その子が送りたい人生を見つけ出す、そういう手助けをすることができたらなあ、と思っています。

そういう高校づくりができればと思うのですが、本学にも附属高校がありまして、昔は非常に進学率の高い有名高校だったんですね。でも、学区を越えて来られるということで、不登校傾向のある子とか、生徒指導上の問題を持つような子が集まるようになって、多様な対応が必要となり、「これが附属高校？」と思うぐらいに学力が下がったという歴史があります。これでは困るということで、高校の先生たちが非常に努力して、今は昔の形に近づきつつあります。

だから、高校の質っていうのは、教員の中で教育理念とか、教育目標を明確にすることで決まるのではないかと思います。本学が成功した一つの要因は、高大連携なんですね。高大連携というシステムは、国立では3校ぐらいしかないと思います。教師になり

たい生徒は、定数は限られているのですが、愛知教育大学に別のルートで入学してきて、
ことができます。そうすると、本当に教師になりたい子たちが来て、大学も視野に入れ、
将来の教師像というのも視野に入れながら選択して、それが結果的に学力を底上げする
ということで、今、上り調子の中にあります。

だから、高校の質や特色を明確にしていく一方で、いろんな子どもたちのやる気を喚
起し、将来ビジョンを持たせていくためには、大学とつながりあうような関係も、大事
なのかなあと思いました。

最後に、外国人児童の問題ですけれども、本学には日本語教育の講座がありまして、
近くに、刈谷は言うに及ばず、豊田とか、安城、三好、豊明を抱えていますので、いず
れも相当数の外国籍の子どもたちがいます。だから、そこにボランティアを含めて、人
を派遣してサポートしていく。それが、大学の実績として認められています。先般、文
科省に伺った時にも、事務次官の方から、愛知県の特性を踏まえた地域連携を是非やっ
てくださいと言われたように、外国人児童の問題については、もっと大規模に取り組ん
でいく必要があると思っています。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

今日の本題とあまり関係ない話になるかもしれませんが、私が少し遠い将来を心配し
ているのは、今まで愛知県は比較的県外から多くの人材を受け入れてきた。これは有力
な産業があるというのが大きな理由の一つでありますけれども、これからのことを考え
ていきますと、当然企業はマーケットと人材がいるところへどうしても拠点を移してい
かざるを得ないのです。そうすると愛知県に、今までどおり人材が吸収できるかどう
かは、一つは有力な企業がずっと存在するかということです。もう一つ心配しているの
は、やはり少子化の影響によって、今まで人材を供給していただいた県外からの供給力
が今後細っていくこと、つまりそれによって当然、企業はやはり優位な人材がいる、例
えば九州ですとか、東北に、一部生産拠点を移していく。こういったことが、当然、将
来的には考えられますし、逆に言えば、愛知県の産業を発展させる上で、労働力が天井
として、将来問題になることが予想される。知事がいろいろ努力して進めていっしや
る企業誘致といった問題もやはり、愛知県に優位な人材が集まるという前提がないと、
なかなか有力な企業が愛知県に拠点を持ってくることはちょっと考えにくい。

そういった面で、教育界におかれましては、是非、いま愛知県にない企業が愛知県に
拠点を移したくなるような人材を多く輩出していただくことが、これから私は非常に重
要になってくると考えています。今までは外から優位な人材を連れてくるということをや
ってまいりましたが、逆に有力な企業を誘致するためには、優位な人材がいるとい
うのは非常に重要です。マーケットそのものは、残念ながら700万人が2千万人にな
ることはちょっと考えにくいので、それよりは、企業が活動する上で非常に重要となる

人材が、愛知県は輩出できるかということが重要だと考えておりますので、教育界の関係者におかれましても、そういった点についても是非お考えいただきたいと思います。

<関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏>

時間はあと 30 分ですので、ポイントだけ 2 点申し上げたいと思います。こうした今後の方向性を考える上では、総花的になると思うのですけれども、今、県の全体予算は 2 兆 3 千 6 百億円、教育分野に 25% ですよ。その中で人件費が 9 割以上で、真水を考えたら極々わずかだと思うのです。これを必ずやるんだということをいくつか重点化されたほうがいいのではないかと思います。先程来ご意見が出ている教員の再研修ということや、この再研修をすることによって、より広い効果が出てくるものや、直近の課題である外国人や不登校の人たちを今後 5 年間で、現時点の 1 割にもっていくという明確なゴールとともに、ぜひ重点化をお願いしたいと思います。

外国人の問題については、既に東京にある多文化共生センターというところや、浜松市や群馬県の太田市などの先行的な取組で、他の学校を紹介したり、母親学級をやったり、相談事業をやったりして、いろいろ包括的な取組がありますので、こういうものを参考にしながら進められるところから進めていただきたいと思います。公費配分の考え方として、先程谷口さんがおっしゃった、とても多いところなんていうのは現状で手に余る訳ですから、こういう子たちを一つの学級に集めて学級編制をしたらいくらぐらいかかるのか、教員増をしたらどれくらいかかるのかということを経験から自主的に予算増を提案して、それに対して予算を付けていくというようなことで、現場の自主性と予算配分の手厚さによって解決するというのが一番現実的な方法だと思います。是非、モデル校みたいなのを数校作っていただいて、そこでのいろいろな解決策が他の学校にも波及していくことが考えられると思いますし、是非、総花的にならずに重点化をして、予算を付けられるところから付けるというような方法でお願いをしたいと思います。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

私は逆に、もっと総花的に、ある一定の方向性をもってやるべきではないかという意見です。先程、江川さんのほうから反転授業の話がでましたけれど 亀山先生からもパワーポイントの話が出ましたけれど、要するにピア・インストラクション、生徒同士、あるいは生徒と教員の双向性の授業を、通常の授業で総花的にやらないと、愛知県は特に今遅れているという風に思います。

今日いただいた資料での学校改革は、学校の種別、コースを多様化させるという政策しか出てこないけども、授業をもっと楽しくしたほうがいい。ワクワク感が出たり、火がついたりして、授業の中でキャリア教育をもっと意識すべき。調べ学習や学習意欲が沸く授業を、遍く全ての授業に取り入れて欲しい。

アクティブラーニングが高校の通常の授業の中にどれだけ組織的に行われているか調べると、愛知県の高校の事例が少ないことが分かります。いろんな県を調査したんですけども、鳥取、神奈川、岐阜も事例がたくさんある。高等学校（特に進学校）で、通常授業の中にアクティブラーニングを組織的に取り入れている高校に河合塾に来てもらって、高校の先生を集めて、研修会、勉強会をやりますので参考まで。

先程、白石先生が組織的な教員の指導と予算、これをちゃんとやるべきだとおっしゃいました。教員の指導法についての開発については、漫画という話もできましたけども、広く言えば授業手法の開発ですよ。反転授業も含めた共同学習、協調学習などいろいろな手法があります。科学的に教育学で研究された最先端の知見がありますのでそういったものをとり入れるのがいいと思います。

また、お互い学び合うのはいいのだけでも、本当に力が付いたのかとか、自分が伸びた、成長したのかという評価の仕方ですね、評価の手法も開発する必要があります。テストも含めて。単なる〇×の評価ではなくて、どういうテストで何を測定をすれば良いのかということ。それから教材開発。これも教育手法の大きな肝であります。そういったところに予算を付けるというのもあるし、一番予算を付けて欲しいのは、全教室にプロジェクターをおいてください。亀山先生もおっしゃったようにパワーポイント以上の道具は必須です。iPadとかは言いませんので、とりあえず、プロジェクターを1台を必ず各教室に設置してください。

また、学校の教育目標を具体的に定め、カリキュラムや教育手法に落とすこともできていないように思います。特に県の場合は、教員の異動がよくあります。もちろん異動するのはいいんです、公務員ですからしょうがないんですけども、学校独自のシステムが急に変わらないように。いくつも見てきました。その先生が居なくなったからまた逆戻りしてアクティブラーニングをやらなくなったとか。そういった逆戻りがないような学校としての組織をきっちりしていく。

そのためには校務分掌の工夫も視野に置いておくことです。教員が減ったりすると、一人がいくつも担当することがあります。その代わり、クラス担任は外すとか、クラス担任はやるけどその他の業務は減らすとか、縦軸の仕事と横軸の仕事をうまく組み合わせさせてやっていく工夫が必要です。

もう一つが、2020年に小学校から始まる次期学習指導要領の骨子が中教審で検討されていますが、その愛知県版を作りましょうということです。国が言っているのは大きく言うと3つです。育成すべき資質・能力を定義しましょう。知識以外に何を能力として身につけさせるんですか、ということ。二つ目が教育目標。何が出来るかという教育目標をきちんとつくりましょう。三つ目がパフォーマンス評価を中心とした評価です。教育評価、これをどうやっていくかということについての議論をしましょう。この3つの方向性を国は出しているんですけども、これを愛知県として引き受けた時に、この3

つの中で、これを具体的に盛り込んでいくという方針を出すべきです。高等学校の魅力づくりであれば、2022年くらいからになるんですかね、それに向けた準備を始めるべきだと思います。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

私はパワーポイントを使っていませんので。人の顔を見て喋らないと相手の反応が分からんもんですから、それでやってきました。

教育には、制度的なものと教員の質といろいろあります。私は、小学校からずっと上に上がれば上がるほど、教員の専門性は高まると思っています。そうすると、上に上がれば上がるほど教員相互が孤立していく、独立なんですね。これが、そもそもまずいところだと思います。高校時代の段階で、将来、いろいろ選択していくという、グローバルな面と、専門性が同時に起こってくる。となると、専門性をつなげていかないと、教育できませんので、そこは学校の運営として教員相互の連携というのをしっかりやるべきだと思っています。ただ、制度として、基礎がないとなかなか難しいと思っています。

大学では、高大連携というのはよくやられています。この高大連携はですね、ちょっと愛教大には悪いんですけど、附属と大学だけ結んだってしょうがないと思っています。例えば、職業学科があるわけです。職業学科は、先程の話、なかなか将来の見通しがつきにくくて、普通科に向かっちゃう可能性がある。とりあえず大学まで。その前にですね、自分の高校で学んだことを生かせる、出口の問題だと思っています。だから場合によっては、コースの違うところと高大連携すれば良いと思っているんです、はっきり言いますと。それぐらいのことで、大学はそれぞれの地域にある専門性のあるところと、高大連携をすべきだと思っています。そうすると、高校側もですね、いくつか選択が可能になるわけです。場合によっては、高校は、いくつかの大学とやってもいいわけです。そういう柔軟性がないと、今は高校に入ってから、中退もかなり多いと言われていて、専門学校行く人もいるわけですね。それはやっぱり先の見通しがつかないということもあるんだらうと思います。大学にとにかく行くという時代ならば。今、大学は、全国に800 いくつかあって、学部名が700 ぐらいあるんだそうです。あらゆる学部があるわけで、そうであれば、高校の総合のところ、少し自分が専門をもう少し生かしたいということであれば、そういう形の連携をやっぱりしないと。今のままでは、なかなか難しい。

生徒のニーズを踏まえたとか、個性化教育というけど、「あなたの個性何？」って聞くと、「えっ」で答える人が多い。学生で一番悩むのはエントリーシートで、自己アピールしなさいっていうのに、書けないんですよ。自分のアピールが何なのか分からないわけ。こんなじゃ企業雇ってくれないわけですよ。それで80社出して、ダメだと泣いてくるんだけど、それじゃ無理だと言っているんですよ。そここのところを、自分でこれができ

るんだとかっていう形の体験を少しずつ積んでいかないと。先生が、いかに個性を理解していくかということに関わっていきますけど。そこをやるべきであって、前から言っているように、高校の改革というのは、もう1つは、やはり単独校でいくのがいいか、併設でいくべきか、その辺のところを考えていかないと。学校内で、やはりあの子は普通科であるとか、あの子は商業科ってことがですね、生徒同士どういう意識を持っているかを考えていかないと。一方は大学行くんだと言っていて、一方は就職するんだと言った時にですね、就職する生徒の意識というのはやはり高まってこない。今、特色化ということでいろいろなことやられていますけども、上(大学)と結びつける形で、進路が見える形で、やるべきだと考えております。

<漫画家 江川達也氏>

先程、意見を言わせていただいた時に、大村知事が「至極全うだ」と言われましたが、逆に大村知事に質問したいんですけど。至極全うな意見がですね現実としては実現されていない訳ですよ。漫画科みたいなものないし、映像科みたいなものもないじゃないですか。何故ないのか、どうお考えですか。

<大村知事>

いや、私が至極全うだと言ったのは、ICT教育で色々と映像を使って能動的に教育したり、映像を使って創造的な活動を行うべきであるということで、申し上げた。

<漫画家 江川達也氏>

だとするならばそういうことが可能な教員を育てなきゃいけないのに、そういうことが可能な教員がいない。

<大村知事>

これからやらないかん。

<漫画家 江川達也氏>

いないっていうのが本当に一番の問題だと思って。愛知教育大学は、僕の母校なんですけど。小中学校の先生は、昔からだいたい愛教大出身で。今でも多分そうなんですけど。他の県に比べて圧倒的に愛教大学閥は強いと思うんですよ。まあ経験則からですけど。

愛教大は、高校の先生は少ないかもしれないけど、愛知県の教員を養成するための大学なんですよ。だとすると、愛教大が変わると愛知県が変わると思うんですけど。愛教大にそういうスキルを上昇させるようなプログラムみたいなのは考えておられるのかな

というのをお聞きしたいですね。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

映像教育をどのレベルでイメージするかですが、今時の学生ですから、入学した時からパソコンを持っています。だから、パワーポイントを使っただけのプレゼンは100%ではないですけども、教育実習を通してやれるようになりますね。

<漫画家 江川達也氏>

授業で教えてるんですか。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

1年とか2年で教えていますが、パワーポイントが出来るようになるのは私が関わっていた学生たちを見ていると3年後半から4年、そのあたりかなと。ただ、現場が望んでいるのはパワーポイントレベルではなくって、先程言っていたような電子黒板とかタブレットを使った授業です。これについては教科で偏りがありますが、数学とか理科、社会科のようなどころだとどんどんそういうものが入りこんでいってます。電子黒板は文科省が肝いりで配置を進めたんですね。ところが学校現場に入れても使えない教師が多くて中途半端になってしまったということです。

<漫画家 江川達也氏>

使えないんですね。さっき、谷口さんがおっしゃったようにプロジェクターを全部に配備すると多分腐ってくるんですよ。使えないから。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

でも、今時はたいていの教室にプロジェクターぐらいはあります。もちろんDVDとかの映像も含めて、プロジェクターにもパソコンの端子ぐらいはあると思います。

<漫画家 江川達也氏>

そのレベルだとパワーポイントぐらいじゃもうだめだと思いませんか。本当に本腰入れて愛教大に、例えば漫画科とか映像科とかそういうものを設置しないとイケないんじゃないか、組織的にきちんと。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

漫画科はちょっと置いておいてですね。

<漫画家 江川達也氏>

だから、なんでできないんですか。なんで漫画科は置いておかれるんですか。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

置いておかれるというわけではなく、私自身は非常に好きで、昨日も漫画で見るなんとかっていう番組を夜中に見てましたので・・・。

<漫画家 江川達也氏>

漫画で歴史を勉強すれば早いじゃないですか。漫画を描ける先生がいれば。もうそれでそのままみんなに配付して、読んどけよって反転授業ができる訳ですよ。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

最後まで言わせて下さい。ともかくさっき言われていたような映像での学習というのはかなり浸透してきています。ただ、経費がかかるという問題があるんですね。4月以降は協力してくれる企業を見つけ、そういう研修を現職の教員にしつつあり、言われるまでもなく進めつつあります。それはもう今の流れですので、ICT教育をどう進めていくかは一つの課題ですから。

<漫画家 江川達也氏>

漫画科を置かれるというのはどうですか。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

それを教える方がいないからというのが一つあります。専任になっていただけますか？結局、教える人がいないんですよ。ICTに関しても、映像科も反転授業も、教員に教える人が養成されていないということです。

<関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏>

いるんですけどね。例えば、リーガルマインドとか、映像系の大学設置の時に、例えばその教員は論文を何本書いたんだとか、ドクターは何人いるんだというようなことを文科省は言う訳ですよ。そういう世界とは別に生きてきた人たちなのに、それにその古い革袋に酒を詰めるがごとく、学校の基準を当てはめるからその人たちは教壇に立てないんです。

<漫画家 江川達也氏>

なぜ教壇に立てないんですか。

<関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏>

ルールがあるからです。

<漫画家 江川達也氏>

ルールが変わらないのは何故でしょう。

<関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏>

既得権があるからじゃないですか。そういう人たちをどんどん入れるということに対して。

<漫画家 江川達也氏>

どうやったら変えられるんですか。既得権を破壊するには。

<関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏>

実際変えられる制度はあるんですけども、出口としてそういうものを認可しないという所管省庁があるからだと思います。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

でもちょっと変わってきています。

<漫画家 江川達也氏>

変わりつつあることは分かるんですけど。

<愛知教育大学学長 後藤ひとみ氏>

いやいや、つつじゃなくって。例えば本学は、現場経験のある教員が14%くらいなんです。まずは20%に増やしますと言っているのですが、やはり実践力のある人を入れなくてはいけないので、今までの論文重視、学位重視の業績審査とは違った意味での審査もやらないと将来の教師としての資質を担保できないという状況です。

<漫画家 江川達也氏>

それはやりつつあるところですよ。私の視点からすると、映像を作っている人たちがあまりにも能力があまりにも低すぎるという感じなんです。変なWebデザイナーに頼むと何千万円も取ってとんでもなくへんてこりんなものしか作らないっていう、ジョーカーをつかまされることが結構多いんですよ。だから、そういうものを教えられる人

とか、そういうものを作ってそこそこレベルの高い人を養成しないと始まらないということじゃないですかね。

<大村知事>

最初にいただいた一回目のご意見は本当に素晴らしかった。

<漫画家 江川達也氏>

二回目はひどかった？

<大村知事>

漫画となると、デザインとか技術もそうですが、ストーリーがいるからより難しいですよ。高度ですよ。

<漫画家 江川達也氏>

難しい。高度だからこそ勉強させなきゃいけない訳ですよ。

<大村知事>

学科だったらまだしも。高校だと難しいんじゃないですかね

<漫画家 江川達也氏>

大学教員養成でそれを作っておけば、それを修得した人たちが教員になればですね。

<大村知事>

それでは、亀山先生最後をお願いします。

<名古屋外国語大学学長 亀山郁夫氏>

ちょっと今と話が違うのですが、今の日本の教育の状況あるいは世界的な状況ということのを少し考えた場合に、気になることは、やはりかなりグローバルリスクというのか、色々な面でのリスクが高まっていることです。非常に難しい問題だと思うんですが、その中で、日本に生きる私たちの精神性といいたいまいしょうか、それが問題化しつつある。つい最近、J1の試合で、浦和レッズのサポーターたちが「Japanese Only」という横断幕を掲げて問題になりました。私は、これに類した排外主義的なナルシズムが、今後若い層に拡大していくことを非常に恐れています。一定程度の富も得た日本が、今後、真の意味で成熟した国として存在感を発揮していくには、あのような排外主義的なメンタリティがあちらこちらで突出するような状況が生まれないようにすることが重要です。

そうしてみると、公教育によって、下を作らないということが大切なのだと思います。下といってもこれは成績のことを言っているわけでは必ずしもありません。良識に欠如した層とでもいえばよいのでしょうか。そういう下の部分が、上の部分を破壊、あるいは食いつくしていく状況になるということを非常に強く危惧しているんですね。

話は戻りますが、専門性つまり個性化をはかることによって、ある意味では一見バランスが失われるようなところもなくはなく、専門性の高い人たちこそ教養教育が重視されるべきだと思います。一つの専門に秀でた人であればこそです。

例として適切ではないかもしれませんが、例えば韓国のキム・ヨナさんは、ソチオリンピックで銀メダルに終わり、それが韓国の人たちからオリンピック委員会への猛烈な抗議行動を生んだ。しかし、それに対する彼女のパフォーマンスが実に見事で、一つ一つの言動のバランスの取り方といいましようか、正直言って関心しました。決して排外主義的なナルシズムとは言いませんが、非常に冷静で、その言葉一つ一つに人間的な真実がこもっている。教養があるとかないとかを超えて、彼女の行動に非常に高い知性を感じたんですね。キム・ヨナさんのような知性を、例えばスポーツが非常に得意な、あるいは芸術が非常に得意だという人たち、つまり影響力のある人たちがきちんと備えているということは、とても重要なことだと思います。そうした教育が実現して欲しいなというふうに漠然と思っています。

そういう意味で、愛知という場に照らして考えた場合に、こういった排外主義的なナルシズムに出てくるような、つまり他者を知らない、あるいは他者がいないといった状況が生まれないようにしてほしいと思います。愛知県の外国人で日本語指導が必要な生徒たちの数がデータで出ておりますが、これこそが愛知県の将来を考える上で重要なファクターになると思います。この状況を反転させ、非常に有利な状況として認識する。愛知県では、他者というものがいる教育が実現されている、そういう意味で最も先進的で、グローバリズされた空間だということが言われるようになると思います。たんに愛知県のみならず、海外に積極的に出て活躍する人材のモデルとなるような人権教育といいましようか、グローバル時代にふさわしい真の人権教育をきちんとしていくことが重要なのかなと思いました。

<大村知事>

ありがとうございました。さらに追加されるという方がおられれば。よろしいですか。十分ご発言いただけましたでしょうか。

個人的な感想だけ申し上げますと、これは答えがあるような話ではありませんけれども、小中一貫がいいのか中高一貫か、高大連携がいいのか、やっぱり確かに日本の教育制度が6・3・3・4で分割されているので、ちょっとあまりに細切れではないか、どっかにくっつけてやったらいいのではないというのは確かにおっしゃる通りだと思うん

ですが、その中で小中なのか、中高なのか高大なのか、それはそれぞれのパターンがあるんだろうと思うんですけども、世の中的には私学はだいたい中高一貫ですね、中学校入ったあと大学入試まではそこでいくというパターンで、そこで学生さんを集めるということなのかもしれません、ほぼそういう形になっているんだと思います。

現実問題、公立の場合には中学校は市町村立、高校は県立ということとなると、そこで相当な割合を中高一貫にしていくのはなかなかそういうのは容易でない、現実問題はあるかと思いますが。ですからそういう中でどういう連携をしていくのかは、私もどうなのかなと答えが見つからないところなのかなと、先程来話があるように確かに外国人の子どもたちのことを考えると、小中をどう連携させていくかが一番のポイントではないかという気がいたします。

私はまさに西三河に住んでおりますから、そういう意味では身近に外国人の子どもたちが非常に多いと。私の子どもたちの同級生にもたくさんいたと。1割、2割じゃありませんからね、小学校になると。高校に行くとぐっと減るということなんで、それが本当にそれでいいのかと言うと、言いわけはないのでね。そういう問題意識はずっと持っております。それは特色ある高校の話とはちょっと違うと思うんですが、ちょっと考えていかなきゃいけないと思います。

今日いただいたご意見の中で、特色のある高校ということでございますが、今年度一年間様々な教育委員会の検討会を作って、様々なご意見をいただいてやっていきますけれども、そういう意味では今日はキックオフということでたくさんのご意見をいただきました。今年一年かけていいものを作っていけたらと思います。そういうことで、ちょうど時間となりました。今日はたっぷりご意見いただきました。ありがとうございました。またこれからもよろしく願います。今日はどうもありがとうございました。

以 上